

杯

森鷗外

青空文庫

温泉宿から鼓つづみが滝たきへ登のぼりて行く途中に、清冽せいれつな泉いづみが湧わき出でている。

水みづは井桁いげたの上うへに凸面とつめんをなして、盛り上げたようになって、余あまったのは四方しやうほうへ流れ落ちるのである。

青い美しい苔こけが井桁いげたの外ぐわいを掩おほうている。

夏の朝である。

泉いづみを繞めぐる木々きぎの梢こぎざえには、今まで立ち籠こめていた靄もやが、まだちぎれちぎれになつて残のこっている。

万斛ばんこくの玉たまを転ころばすような音をさせて流ながれている谷川やがはに沿したがうて登のぼる小道せうだうを、温泉宿おんせんじやくの方かたから数人すうにんの人が登のぼりて来るらしい。

賑にぎやかに話しながら近づいて来る。

小鳥が群がさえつて囀さえずるような声である。

皆子供に違ちがない。女の子に違ちがない。

「早くいらつしやいよ。いつでもあなたは遅れるのね。早くよ」
「待まちつていらつしやいよ。石がごろごろしていて歩きにくいので
すもの」

後おくれ先立つ娘の子の、同じような洗髪を結むすんだ、真赤な、幅の
広いリボンが、ひらひらと蝶ちょうが群むられて飛ぶように見えて来る。

これもお揃そろいの、藍あ色の勝かった湯帷子ゆかたの袖そでが翻ひるる。足あしに穿はいて
いるのも、お揃そろいの、赤い端緒はなの草履わらじである。

「わたし一番よ」

「あら。ずるいわ」

先を争うて泉の傍そばに寄る。七人である。

年は皆十一二位に見える。きようだいにしては、余り粒が揃っている。皆美しく、稍やや々なまめかしい。お友達であろう。

この七顆かの珊瑚さんごの珠たまを貫くのは何の緒か。誰たれが連れて温泉宿には来ているのだらう。

漂う白雲の間を漏れて、木々の梢を今一度漏れて、朝日の光が荒い縞しまのように泉の畔ほとりに差す。

真赤なりボンの幾つかが燃える。

娘の一人が口に銜くくんでいる丹波酸漿たんばほおずきを膨ふくらませて出して、泉の真中に投げた。

凸面をなして、盛り上げたようになって、井桁の外へ流れ落ちた。酸漿は二三度くるくると廻つて、

「あら。直ぐにおつこつてしまふのね。わたしどうなるかと思つて、楽しみにして遣^やつて見たのだわ」

「そりゃあおつこちるわ」

「おつこちるといふことが前から分つていて」

「分つていてよ」

「嘘^{うそ}ばっかし」

打つ真似をする。藍染の湯帷子の袖が翻る。

「早く飲みましょう」

「そうそう。飲みに来たのだったわ」

「忘れていたの」

「ええ」

「まあ、いやだ」

手ん手に懐ふところを搜さがつて杯を取り出した。

青白い光が七本の手から流れる。

皆銀の杯である。大きな銀の杯である。

日が丁度一ぱいに差して来て、七つの杯はいよいよ耀かがやく。七条

の銀の蛇へびが泉を繞はしつて奔る。

銀の杯はお揃で、どれにも二字の銘がある。

それは自然の二字である。

妙な字体で書いてある。何か扱よりどころがあつて書いたものか。それと

も独創の文字か。

かわるがわる泉を汲くんで飲む。

濃い紅の唇くちびるとがを尖らせ、桃色の頬ほおを膨らませて飲むのである。

木立のところどころで、じいじいという声がある。蟬せみが声を試みるのである。

白い雲が散ってしまつて、日盛りになつたら、山をゆるする声になるのであろう。

この時ただ只一人坂道を登つて来て、七人の娘の背後せうに立っている娘がある。

第八の娘である。

背は七人の娘より高い。十四五になつているのであろう。

黄金色の髪を黒いリボンで結んでいる。

琥珀こはくのような顔から、サントオレアの花のような青い目が覗のぞい

ている。永遠の驚を以もつて自然を覗のぞいている。

唇だけがほのかに赤い。

黒の縁へりを取った鼠色の洋服を着ている。

東洋で生れた西洋人の子か。それとも相あいの子こか。

第八の娘は裳ものかくしから杯を出した。

小さい杯である。

どこの陶器か。火の坑あなから流れ出た熔よう巖がんの冷めたような色を

している。

七人の娘は飲んでしまった。杯を漬つけた迹あとのコンサントリック

な圈わが泉の面に消えた。

凸面をなして、盛り上げたようになってゐる泉の面に消えた。

第八の娘は、藍染の湯帷子の袖と袖との間をわけて、井桁の傍に進み寄つた。

七人の娘は、この時始てこの平和の破壊者のあるのを知つた。

そしてその琥珀いろの手に持っている、黒ずんだ、小さい杯を見た。

思い掛けない事である。

七つの濃い紅の唇は開いたままで詞ことばがない。

蝉はじいじいと鳴いている。

良や久やしい間、只蝉の音がするばかりであつた。

一人の娘がようようの事でこう云った。

「お前さんも飲むの」

声は訝いぶかりに少しの嗔いかりを帯びていた。

第八の娘は黙うなずつて頷うなずいた。

今一人の娘がこう云った。

「お前さんの杯は妙な杯ね。一寸ちよつと拝見」

声は訝あなどりに少しの侮あなどを帯びていた。

第八の娘は黙うなずつて、その熔巖の色をした杯を出した。

小さい杯は琥珀いろの手の、臆けんばかりから出来ているような指

を離れて、薄紅のむっくりした、一つの手から他の手に渡った。

「まあ、変にくすんだ色なこと」

「これでも瀬戸物でしようか」

「石じゃあないの」

「火事場の灰の中から拾って来たような物なのね」

「墓の中から掘り出したようだわ」

「墓の中は好かったね」

七つの喉のどから銀の鈴を振るような笑声が出た。

第八の娘はりようひじ両臂りょうひじを自然の重みで垂れて、サントオレアの花のような目は只じいつと空くうを見ている。

一人の娘が又こう云った。

「馬鹿に小さいのね」

今一人が云った。

「そうね。こんな物じゃあ飲まれはしないわ」

今一人が云った。

「あたいのを借かそうかしら」

あわれみ
 慙あわれみの声である。

そして自然の銘のある、耀く銀の、大きな杯を、第八の娘の前に出した。

第八の娘の、今まで結んでいた唇が、この時始て開かれた。

MON 《モン》・VERRE 《ヴェヘル》・NEST 《ネエ》・PAS

《ペア》・GRAND 《グラン》・MAIS 《メエ》・JE 《ジエ》・BOIS

《ボア》・DANS 《ダン》・MON 《モン》・VERRE 《ヴェヘル》

沈んだ、しかも鋭い声であった。

「わたくしの杯は大きくはございません。それでもわたくしはわたくしの杯でいただ戴きます」と云つたのである。

七人の娘は可哀らしい、黒い瞳ひとみで顔を見合つた。

言語が通ぜないのである。

第八の娘の両臂は自然の重みで垂れている。

言語は通ぜないでも好いい。

第八の娘の態度は第八の娘の意志を表白して、誤解すべき余地を留めない。

一人の娘は銀の杯を引つ込めた。

自然の銘のある、耀く銀の、大きな杯を引つ込めた。

今一人の娘は黒い杯を返した。

火の坑から湧き出た熔巖の冷めたような色をした、黒ずんだ、小さい杯を返した。

第八の娘は徐しずかに数滴の泉を汲んで、ほのかに赤い唇を潤した。

青空文庫情報

底本：「山椒大夫・高瀬舟」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年5月30日発行

1985（昭和60）年6月10日41刷改版

1990（平成2）年5月30日53刷

※底本には、表記の変更に関する以下の注記が見られる。

「本書は旧仮名づかいで書かれていたものを（中略）、現代仮名づかに改めた。」

加えて、極端な宛て字と思われるもの、代名詞、副詞、接続詞などは、以下のように書き換えたとある。

…か知ら↓…かしら 此↓かく 彼此↓かれこれ …切り↓…きり 此↓これ 是↓これ 流石↓さすが 併し↓しかし 切角↓せつかく 其↓その 大ぶ↓だいぶ …丈↓…だけ 兎角↓とにかく 所で↓ところで 只管↓ひたすら 迄↓まで 儘↓まま 矢張↓やはり

入力：砂場清隆

校正：松永正敏

2000年8月9日公開

2006年5月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

杯

森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>